

浄土

monthly
JŌDO

9

September 2005



02/10 根岸
浄土通リ商店街

法然上人鑽仰会



平成14年1月号



平成14年2,3合併号



平成14年4月号



平成14年5月号



平成14年6月号



平成14年7,8合併号



平成14年9月号



平成14年10月号



平成14年11月号



平成14年12月号

浄土

2005/9月号 目次

ライブラリー浄土

白拍子静御前の事.....	榊 泰純	2
歌舞伎のモデルとなった？徳本行者		
清玄桜姫	古井戸秀夫	8
仏教コラム	大室了皓	15
熊野古道に行く最終回	森 清鑑	16
表紙の言葉	村上 健	23
会いたい人 池部良さん①	関 容子	24
響流十方	林田康順	32
日本酒のことば 日本酒のじかん	蓮門小子	36
J-BOOK		38
シネマ随想	袖山榮真	40
Jフォーラム		43
浄土誌上句会		44
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよしろう	47
編集後記.....		48



表紙題字＝浄土門主 中村康隆猊下
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

白静の 拍子御事 前子

桙泰純

可部信重作中 主門上系一宗徳川氏
御政一 御政一 御政一 御政一 御政一
御政一 御政一 御政一 御政一 御政一

今、NHKの大河ドラマで放映中の「義経」にまつわる話の一齣をご紹介します。

源義経の思い人に静御前がいます。源頼朝と不仲になった義経は、文治元年（一一八五）十一月六日夜、大阪の天王寺のあたりに泊まった後、吉野に潜行します。吉野から更に奥に入った義経と別れた静御前は、十七日夜十時頃、金峯山の蔵王堂で、衆徒に見とがめられて捕えられ、京都へ連れ戻されて、北条時政の尋問を受けます。静御前発見の知らせは鎌倉に伝えられ、文治二年一月二十九日、頼朝より鎌倉に送るよう指示がありました。静御前が母磯の禪師と共に鎌倉に着いたのは三月一日。鎌倉幕府の公式の歴史書『吾妻鏡』によると、三月六日から取り調べは始められ、二十二日に、静御前が妊娠していることがわかり、取り調べは中断されています。

静御前の舞

『吾妻鏡』の文治二年（一一八六年）四月八日の条にある記事によって、鎌倉に連れてこられていた静御前の舞について述べてみましょう。

四月八日、鶴岡八幡宮に参拝した源頼朝と妻政子は、静御前に白拍子舞を舞わせることに成功します。それは、前々から舞うように命ぜられておりましたが、病氣なので舞えないと断ったり、義経の思い人が晴れの舞台で舞うのは恥辱であると断ったりしていたのです。「天下の舞の名手が鎌倉に来ており、まもなく京都へ帰るというのに、その芸を見ら



れないのは残念です」という政子の申し出に、頼朝は、静御前を連れ出すことができたのです。それでも固持する静御前に、八幡大菩薩に法樂をしてお供えするのだから、という説得によって成功したのです。

工藤祐経が鼓を打ち、畠山重忠が銅拍子を合わせて——『義経記』には、工藤祐経が鼓を打ち、梶原景時が銅拍子、畠山重忠が横笛を吹いたとなっていますが——静御前が謡いながら舞っています。その歌は次のようなものです。

「しづやしづ賤のをだまき繰り返し 昔を今になすよしもかな」

（また再び繰り返し義経がときめいたような世にする方法があつたらよいがなあ）

「吉野山嶺の白雪踏み分けて 入りにし人の跡ぞ悲しき」

（吉野山の白雪を踏み分けて奥に入っていた人が恋しい）

この白拍子舞は素晴しく優秀なものであつて、「上下皆感興を催す」というものでした。しかし、頼朝は、八幡宮の前でする芸であるから「関東の万歳」を祝うべきであるのに、頼朝の面前であるにもかかわらず、「反逆の義経を慕い」、その別れの曲を謡うとは「奇怪」ではないか、と怒っています。この部分を『義経記』では次のように伝えています。

「白拍子は興醒めたるものにてありけるや。今の舞ひ様、歌の謡ひ様、怪しからず。頼朝田舎人なれば、聞き知らじとて歌ひける。「しづのをだまき繰り返し」とは、頼朝が世尽きて九郎が世になれとや。あはれおほけなく覚えし人の跡絶へにけりと歌ひたりければ」

（白拍子は興醒めしたものであつたのだなあ。今の舞いよう、歌の謡いよう、けしからん。頼朝は田舎者なので、ものを知らないのだと歌っている。「しづのをだまき繰

り返し」とは、頼朝の世が終わって、義経の世になれというのか。ああもったいなく
思った人の跡が絶えてしまったと終わったので)

これを聞いて妻の政子は頼朝にいいます。「あなたが流人として伊豆にいた時、私と将
来を誓ったにもかかわらず、父北条時政に仲を裂かれました。それでも私は、暗夜、雨の
中、あなたのもとに走ったことがあります。石橋山の戦いに敗れた後も、伊豆山に残って、
あなたの身を案じました。今の静御前の心境も同じです。義経のことを忘れるようでは貞
女ではありません。その心境を舞いに表した静御前をほめてあげるべきです」

頼朝の怒りは納まり、静御前は引き出物までもらった。と伝えています。「義経記」に
よりますと、静御前の前に、母の磯の禅師が舞ったことを記しています。名手である母と
子が、鶴岡八幡宮の神前で、法楽のために白拍子の舞を舞ったのです。「義経記」の内容
を詳しく知りたい方は、巻六の「静若宮八幡宮へ参詣の事」をご覧ください。

白拍子の始め

この静御前が舞っていた白拍子舞の始めについては、二つの説が伝えられています。そ
の一つは『平家物語』巻一「祇王」の条に伝えられているものです。

「抑、我朝にしら拍子のはじまりける事は、むかし鳥羽院の御宇に、しまのせんざい、
わかのみひとて、これら二人がまひいだしたりけるなり。はじめはすいかんにたて烏

帽子、白ざやまきをさいてまひければ、おとこまひとぞ申ける。しかるを、中比より烏帽子刀をのけられて、すいかんばかりをもちゐたり。扱こそ白拍子とは名付けられ（そもそも日本に白拍子が始まったことは、昔、鳥羽院のおさめられていた時に、鳥の千歳と若の前といって、これら二人が舞いだしたのであります。始めは水干に立烏帽子、白鞘巻をさして舞ったので、男舞と申しました。それなのに、中頃から烏帽子と刀はのけられて、水干ばかりを用いました。そこで白拍子と名付けました）

ここにあるお話は、鳥羽天皇の時代に、鳥の千歳と若の前という二人の女性が舞い始めたこと、はじめは水干——狩衣をさらに簡略化したもので、糊を用いずに水で張って干した絹で製したもの——を着、立烏帽子をかぶり、白鞘巻の刀をさして舞ったので、「男舞」と呼んでいたこと、後に水干ばかりを着ていたので「白拍子」と名付けられたというものです。

もう一つの説は、兼好の『徒然草』二二五段に、永仁三年（一二九五）に八十二歳でなくなった楽人、多久資が語ったという説です。

「多の久資が申しけるは、通憲入道、舞の手のうちに興あることどもを選びて、磯の禪師といひける女に教へて舞はせけり。白き水干にさうまきをささせ、烏帽子を引き入れたりければ、男舞とぞいひける。禪師がむすめ、静といひける、この芸をつげり。これ白拍子の根源なり。仏神の本縁をうたふ。そののち源の光行、多くのことを作れり。後鳥羽院の御作もあり。亀菊に教へさせたまひけるとぞ。

（多の久資が申したことには、通憲入道が舞の手の中からおもしろい所作のところを選んで、磯の禪師という女に教えて舞わせました。白い水干に鞘巻の刀をささせ、烏

帽子を冠らせたので男舞といいました。禪師の娘の静というのが、この芸を相続しました。これが白拍子の根源であります。仏や神の縁起を歌う。その後、源の光行がたくさんの歌を作りました。後鳥羽院の御作もあります。これは亀菊にお教えになったものだといひます)

この説によりますと、藤原通憲が舞楽の所作の中からおもしろい部分を抜き出して、磯の禪師に教えたこと、その姿は白い水干に鞘巻の刀をささせ、烏帽子を冠らせたので「男舞」といったこと。娘の静御前がその芸を相続したこと、そのうたう歌は仏神の縁起をうたったものであったことを伝えていひます。これによりますと、静御前は、正統の白拍子舞を伝えていたことになりひます。

鶴岡八幡宮での舞い姿は、どんなにかすばらしかったことでしょう。

(大正大学名誉教授・東京虎ノ門・興昭院住職)



歌舞伎の
モデルと
なった？
徳本行者

清玄桜娘

早稲田大学教授

古井戸秀夫

江戸時代の歌舞伎や小説の題材となって流行したもののひとつに、「清玄桜姫」がありました。もともとは、京都の清水寺の清水観音の利生譚として語られたものだったようです。清水寺の若僧清玄が桜姫を見初め、その色香に迷って生霊、死霊となっても姫に纏わり付きますが、観音さまのお導きで解脱をするという物語でした。死んだ桜姫が冥界をさま迷ったすえに救いの光を見つけたのも、浄土宗で教えるところの「二河白道（にがびやくどう）」でした。火の河、水の河、恐ろしいふたつの河に挟まれて白い道があります。その白い道を、阿弥陀さまのお導きで渡りますと極楽往生ができます。「清玄桜姫」の物語は、煩惱に苦しむ若い僧侶の解脱の物語であるとともに、桜姫の女人往生を説く物語でもあったようです。

この物語が江戸の歌舞伎へ移されますと、観音さまのご縁で舞台が浅草の観音や鎌倉の長谷寺の観音に移るようになります。舞台が

江戸に移されても、京都の清水寺の有名な舞台や音羽の滝を再現して、江戸の歌舞伎ではそれを「新清水」と呼んでいます。現在の歌舞伎では、京都の清水寺の清玄の物語は絶え、江戸の新清水を舞台にした作品が上演されています。そのような「清玄桜姫」物の歌舞伎を代表する作品が、文化十四年（二八一七）に書き下ろされました鶴屋南北作『桜姫東文章』です。この作品の清玄には、それまでの「清玄桜姫」の物語にはなかった、ふたつの特色がありました。そのひとつが、浄土宗の徳本行者の面影を投影したことだと思っています。

徳本は、紀伊の国日高の郡に生を受けました。諸国を修行して歩き、お十念の功德で知られるようになりました。文化十一年（一八一四）江戸に下り増上寺を訪れると、大勢の大奥の女中たちが待ち受けています。徳本行者は、女人往生を願って女性たちに十念を授けました。翌々日には、紀州徳川家の赤坂の

屋敷に招かれ、姫君をはじめ三百八十九の善男善女に十念を授けています。以後、一橋殿、民部卿殿、兵部卿殿、乗蓮院の方をはじめ、大名家の若君や姫君を残りなく訪ねて十念を授けられたといひます（『徳本行者伝』）。

『徳本行者法語』という本には、徳本の十念の唱え方が詳しく紹介されています。徳本は、念仏の唱え方を教えますといい、「南」と唱えると信者が「南」といひます。次に、「無」「阿」「弥」「陀」と一字ずつ唱えては復唱する。次には、徳本が「南無」の二字を唱え、信者が復唱。おなじく「阿弥」「陀仏」の二字が繰り返されます。それから始めて「南無阿弥陀仏」を徳本が唱え復唱し十念になります。このような徳本行者の唱える十念は、歌舞伎の中にどのようなかたちで再現されることになるのでしょうか。

『桜姫東文章』には、江ノ島に伝わる稚児が淵の伝説に基づいて、清玄と桜姫の前生（さきしょう）にかかわる因縁の物語が付け加え

られています。このことが、それまでの「清玄桜姫」にはない、あたらしい清玄の姿を生むことになります。

まだうら若き所化であった清玄は、恋をします。相手は、鎌倉雪の下の相承院の白菊丸という名の稚児でした。白菊丸は「どうぞ女子（おなご）に生まれ来て、女夫になりとう思います」といい、「女子ばかりが世の中の、妹背いもせとやらじゃありやしまい」という長唄を聞いて、岩壁から飛び降りて海の藻屑と消えます。しかし、清玄は、江ノ島の稚児が淵に伝わる伝説の自久和尚のように潔く死ぬことは出来ませんでした。逆巻く波に恐れをなした清玄は、生き残ってしまいました。

それから十七年という時間が経過しました。ひとり生き残ってしまった自責の念からでしょう、仏道の精進を重ねた清玄は阿闍梨の位に上り、長谷寺の住職となり將軍の帰依を受ける日本第一の高僧になっています。そのような清玄阿闍梨の目の前に、白菊丸の生

まれ変わり桜姫が現れます。桜姫は、生まれつき左の掌が開きません。それを苦にして出家を願ひ、清玄を慕って来たのでした。そのような桜姫の境遇に同情し、清玄阿闍梨は十念を授けます。歌舞伎の台本に拠って、その姿を再現してみることにしましょう。

清玄 シテ、年はいくつぞ。

長浦 ハイ、お十七でござります。

清玄 みな同音に念仏（ねぶつ）執行いたされよ。

皆々 ハア。

ト清玄数珠を持ち、桜姫に向かう。皆々、思い入れ。

清玄 南無阿弥。

皆々 南無阿弥。

清玄 南無阿弥。

清玄が十念を繰り返すと桜姫の体が揺れ始め、下座音楽の太鼓が「どろどろ、どろどろ」と打たれます。十念の終わりには、桜姫の開かなかった掌が開き、中から小さな香箱の蓋

が出ました。この香箱こそ、十七年前に清玄が稚児白菊丸と取り交わした形見の香箱でありました。若き日の清玄と白菊丸、ふたりだけの秘密の香箱を見て、桜姫が白菊丸の生まれ変わりだと悟った清玄は、「人死して、ひとたび去って、いずれのときか帰るとは、古語にもいえどこれはまた、一念この土に留まって、輪廻放れず生（しょう）を引きしか」と観念します。それとともに、忘れていた肉欲の記憶がよみがえり、清玄は破戒墮落して転落の坂道を転げ落ちてゆくことになります。

渋谷・コクーン歌舞伎2005六月公演に、『桜姫東文章』は『桜姫』というタイトルで上演されました。中村福助の桜姫、中村橋之助の清玄という配役です。清玄の唱える十念の力で、美しい姫君に奇跡が起こります。二百年前に江戸の大奥や大名屋敷で流行した徳本行者の十念の面影を感じ取ることができました。



山形天童・佛向寺徳本行者像

徳本 とくほん

宝暦八年（一七五八）六月二十二日

——文政元年（二八一八）十月六日

名蓮社号譽称阿弥陀仏と号し、宝暦八年六月二十二日、紀伊国日高郡志賀村久志に、田伏三太夫の子として生まれ、同十一年隣家の小児の死を見て無常を感じ、明和四年（一七六七）のころから念珠を身からはなさず念仏し、安永二年（一七七三）のころには水垢離して励声念仏した。

天明二年（一七八二）春同地財部村往生寺大円から五戒を受け、同四年六月大円を師として剃髪得度を受け、幼名三之丞を徳本と改めた。翌年春月正寺で三十日間不断念仏を修し、千津川の山に草庵を構えて苦修念仏、寛政三年（一七九一）萩原の草庵に移り、苦修鍊行をつむなど山川寒暑に身を曝して、見仏三昧発得の境地に入った。

それより地方遊化を志し、寛政六年五月上洛して知恩院に登嶺、祖廟をはじめ京中での祖蹟を巡拝し、九月熊野に詣でて帰郷、須ヶ谷山崎に草庵を結んで念仏した。摂津国灘では吉田道可居士を化益したが、徳本は幼年より文字を習わず、師大円に『阿弥陀経』の句

読を習ったのみで、祖伝や『語燈録』を読んで宗要を解し、奥義に達した。

享和三年（一八〇三）十月京都鹿ヶ谷法然院で除髪して比丘形となり、十一月関東に下り小石川伝通院に鸞洲を訪い、君誉智嚴は「不請の友」といって喜び、十二月智嚴から宗戒兩脈および布薩を相承した。その夜、勝尾山の松林庵に寓居し、浪華・明石・近江・和歌山の地域で教化し、文化八年（一八一二）以来たびたび増上寺典海の招きをうけ、江戸下向の志をかため、同十一年六月十二日江戸に入り、隅田川のほとりに念仏堂を建立して住することになった。

以来、東海道・中仙道筋を布教に従事し、文化十四年小石川一行院を捨世道場としたが、翌文政元年十月六日歿した、世寿六十一歳。留錫の地には、独特の書風をもった名号碑が多く残存しており、弟子は現定・鸞洲・本仏・本明など多く、福田行誠編の『徳本行者伝』中の「法弟小伝」には十二人の略伝を挙げ、六十卷本『徳本行者伝』には弟子連名略記に二八八人（男）、二二三人（尼）の計五一一人を列挙している。その伝は『徳本行者伝』六十六卷、福田行誠著『徳本行者伝』三卷に収められ、伝記・逸話・法話を集大成したものに戸松啓真編『徳本行者全集』全六卷がある。

大室了皓 コラム おおむね、りょうこう

「いっそ死んでしまいたい」

深刻な表情で彼女は話し始めた。

「時々癲癇^{てんかん}の症状が出る。軽い方だが頭痛がきて手足が痺れ始め、三十分も治まらないことがある。薬をのむと眠くなり、子供の世話も十分に出来ないし、主人にも迷惑をかけてしまう。努力はするが何事も中途半端なことばかり、皆に迷惑ばかりかけ、生きてるのが辛くなって」

「ご主人は」

「心配して大事にしてくれます。それだけに一層辛いんです」

聞いているうちに、彼女は完璧主義者で、そこまで出来ない自分に悩んでいると気が付き、私の生き方を説いてあげた。私の名前は、オオムロリョウコウです

が、「ロ」を「ネ」と置き換えると、オオムネリョウコウ（概ね良好）となります。私はこれが気に入っています。テストならともかく、世の事で百点満点を取るのとは不可能です。人間わざではありません。百点取る努力はしますが「概ね良好」が限度です。ここまで出来れば、総理大臣にもなれます。

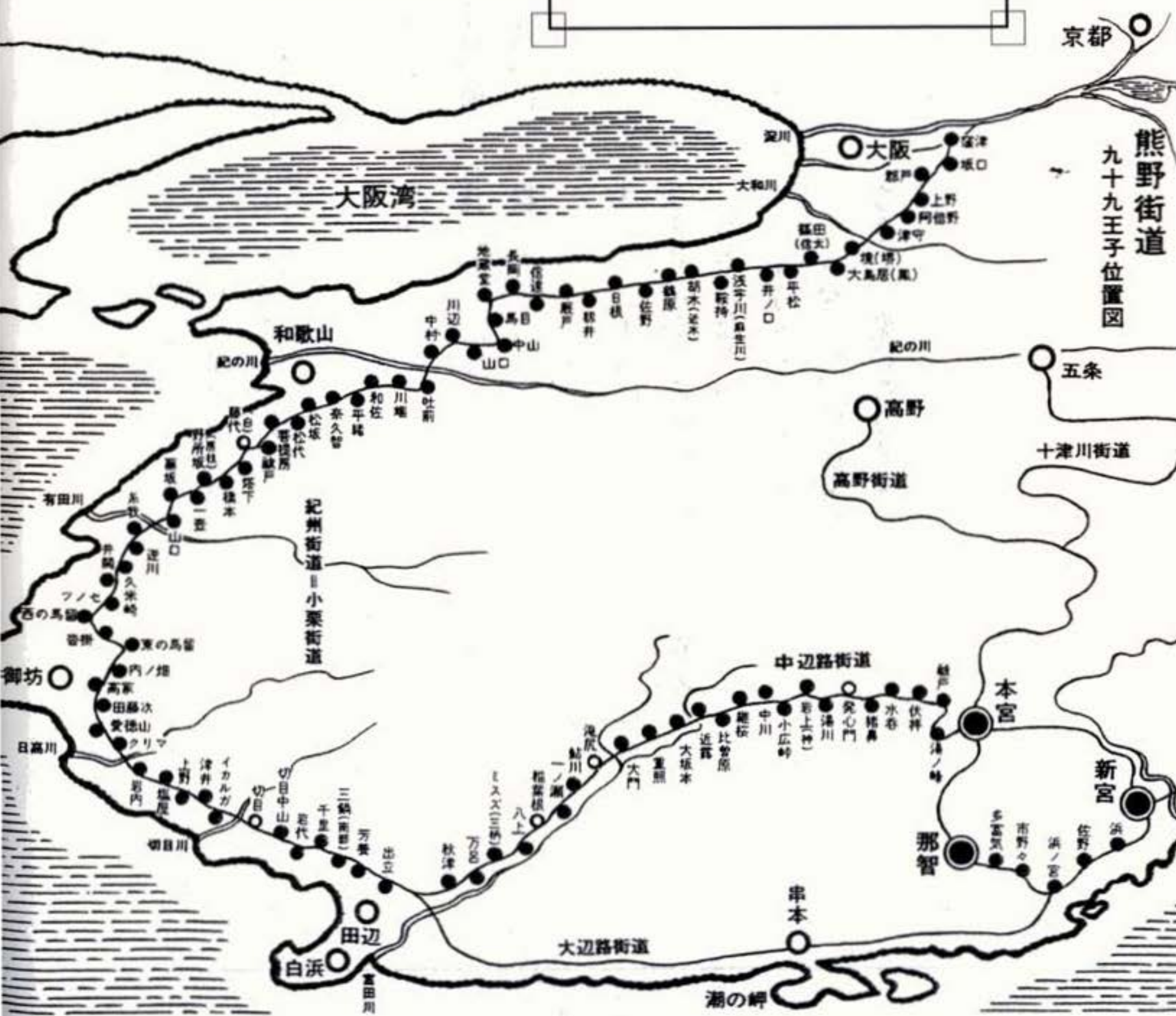
貴女は「概ね良好」の限度に達していません。ご主人は理解しておられるではありませんか。これ以上に自分を責めるのはおやめなさい。

出来なかったら「あらごめんなさい」と大きな声で、嫌な気持ちを笑い飛ばしなさい。楽になりますよ、と。

熊野古道 を行く

最終回

森清鑑



浜王子から 佐野王子へ

徐福の墓から蓬萊山ふもとの新宮最古といわれる阿須賀神社あすかに戻り海に向かって行くと新宮から那智大社に向かう最初の王子社、浜王子神社がある。そして王子ヶ浜沿いの古道を歩く。とはいえ一里塚までは舗装道路。のどかで豊かな山村の風景。秋だというのに暑いくらいの陽気で、花が咲き、野菜畑で働いている人が気軽に挨拶してくれる。やがて高野坂やさかの古道を登る。ここは古道のイメージを豊かに残している。ときおり覗かれる磨り減った古道石畳の跡。原生林の木々のトンネルを抜けて尾根に立つと王子ヶ浜の美しい海岸線が一望できる。白浜と対照的な青い海がまぶしい。昔の人々はこの絶景に感嘆しつつ、歩いたことであろう。海沿いの展望台に辿りつくとも熊野灘が眼下に広がる。秋とはいえ暑い陽光で日陰を求めたいくらいだ。原に一輪

の花が美しく咲いていた。

佐野王子

三輪崎から海沿いの佐野王子に着く。風光明媚な佐野松原海岸沿いにある。海に向かって洗濯板が連なるようなこの美しい海岸は、万葉古歌にも度々登場する。しかし、古道の面影は皆無で、ひっきりなしに車が行き交う。海沿いの舗装道路に面して王子社跡の石碑が立っている。王子跡に並んで北条政子が建てた宝篋印塔ほうきょういんとう（鎌倉時代）と神武天皇の石碑が立っている。北条政子は五十六才と六十二才の二度、熊野詣を行っている。湯浅近郊の興国寺にある息子実朝の墓のこともあり、彼女の熊野参詣への思い入れは深い。このことは時の鎌倉幕府がそれだけ熊野擁護に気を使っていたということであろう。一方の神武天皇の石碑は「神武天皇の東征」を象徴している。『日本書紀』に謳われている「遂に狭野（佐野）を越えて、熊野の神邑みけむらに至り…」に因むものである。佐野は、鎌倉時代以前に二十

◆王子ヶ浜



八軒もの鍛冶屋があつたという。あきらかに製鉄の技術を持った渡来人が移り住んだものと思われる。徐福伝説ともあいまって、興味深いものがある。この風光明媚な海岸で埋め立て工事が始まっている。その結果どれだけの経済効果をもたらすといふのであろうか。暗澹たる思いがした。

佐野王子から宇久井半島に行く。静かな漁村だ。この辺りの人々は鯖を食さないという。十月の鯖は最高の味なのに、どうやらこの風習は徳川時代が残した悪癖ということらしい。宇久井の海岸沿いに「ホエール・ウォッチング」の乗船場がある。熊野灘には昔から潮の関係で鯨がくる。今でも来る。古来、捕鯨で有名な太地はすぐ傍である。そういえば、勝浦温泉旅館ではめずらしい鯨の臓物漬けを売っていた。

浜の宮王子と補陀楽山寺

宇久井から海沿いの古道をしばらく行くと、はま浜の宮王子みやに着く。鳥居の右側に楠の巨

木が二本立っている。おそらく八百年以上は経っているであろう。威厳に満ちた神木である。境内にも数本の古木がある。古図によると今は街並だがこの鳥居まで波が押し寄せていたことになる。なにしろ、浜の宮神社の左隣にかの有名な補陀ふだらくさんじ楽山寺があるのだから。ここから渡海とかいしやうにん上人達は補陀楽浄土を目指し、小船に乗り、果てしない海へと散華したのである。十六世紀の那智参詣曼荼羅絵図によると、補陀楽山寺、浜の宮王子の背後に那智大社、青岸渡寺、那智の滝が一体で描かれており、当時の信仰概念を表わしている。

補陀楽山寺は、比較的こじんまりした寺社である。だが、ご住職の話によると仏教は当寺に伝来したとの説があるそうだ。然るべき文献は発見できぬそうだが、だとすればこの寺社の歴史から見ても、仏教伝来は六世紀ではなく、四世紀だという説が浮上する。この寺の歴史はそれほど古い。古い寺社の内部で堅固な防火壁に守られた、平安初期の千手観

音を拝謁できた。いくえもの扉を開くと、姿を顕わされた観音さまは三面観音で手は四十本ある。通常の千手観音の手は四十本。そこからしてまずめずらしいという。人間には食欲、性欲を始め二十五の基本的な欲がある。基本欲から派生する欲は千ある。ゆえに観音様が人間をこれら全ての欲から守るためには、計算では千本の手が要る。したがって千手観音という。しかし、一本の手で二十五欲を解消して頂き、四十本の手で代表してもらうというわけである。ここの観音様の手が四十四本というのは、胸に二列に組んだ手を四本加えているからだ。その柔和にして威厳あるお顔立ち、彫像美は凄みさえ感じさせる。お顔は左側から見ると柔和に見え、右から見ると厳しく見える。天井のライトを消すと現実味を帯びた逞しい山男然としたお顔に変貌する。

寺社の左側に著名な渡海舟とかいぶねの原寸大模型が展示されている。この小さな舟に乗り、渡海

上人達は、補陀楽往生を遂げたのである。航海の目的地、お浄土の世界、補陀楽とは、中国かインドと目されている。長さ五メートル程度の小船の中央は箱型で、渡海上人はここに入る。そして全く外部と遮断される。箱内の前方にろうそくと、御神酒が置かれている。渡海往生が行われたのは、八六八年から一二〇二年までといわれている。十九回から二十八回挙行されたらしい。ところが鎌倉時代に、ある上人が海上から逃げ出すことが起きた。そこでこのような自殺行為は邪道と幕府が断を下し、それからは下火になったという。だが、渡海往生は江戸中期まで行われたという説もある。当時の人々にとって山上他界は那智本宮大社に存在し、ここで火焼され天上に帰るとされた。これに対し「海に天上の世界あり」という考えが補陀楽往生をもたらしたと見られる。実は、平重盛の嫡男、維盛も渡海往生を遂げたという話（平家物語）も残っている。補陀楽山寺の裏山に渡海上人の墓が

ひっそりと立っている。
多富氣王子

古道は補陀樂山寺から那智川に沿って大社へと登っていく。尼將軍供養塔、市野々王子いちののを経ていよいよ那智大社へと向かう。左手に旧旅館と十一文関所跡がある。この古い宿は、今は閉館しているが南方熊楠が三年もここに逗留し、研究活動が続けたそうで、彼のフィールド・ワークのひとつの拠点でもあった。今の所有者の親父さんが裏庭にまで案内してくれ、十一文関所のことなど説明してくれた（関所では通行税を取っていた）。関所跡を過ぎるとすぐ前方に巨大な夫婦杉が立っている。古道の左右に立つこの二本の杉は那智大社への門のようでもあり、幹回り八・五メートル、樹齡は八百年を超えているという。夫婦杉をくぐって登っていくと右側にいよいよ最後の九十九番目の王子社、多富氣王子跡たふけがある。多富氣とは峠を意味するらしい。昔は路沿いにちゃんとした社が建っていたのであ

ろう。今は木に覆われ、その辺りの地勢を読み取ることも困難である。

多富氣王子跡を過ぎるといよいよ大門坂だいもんざかにさしかかる。数知れぬ人々がこの道を歩んだのである。法皇、上皇、西行法師、文覚上人もんがくもこの坂を登って行ったのであろう。鎌倉時代の石段がそっくりそのまま残されている。苔むし、滑りやすい。坂の両側は、杉の大本に蔽われ、「昼なお暗し」の感。峻厳、深淵さを感じさせる坂路である。

熊野那智大社

大門坂を登りきるとそこは那智大社である。山を背景に壮麗な社殿は六殿あり、ここに国づくりに縁の深い十二柱の神々を祭っている。主神は第四殿（西御前）の熊野夫須美大神（クマノフスミノオオカミ）Ⅱ伊弉諾尊（イザナミノミコト）で、二殿の証誠殿には家都御子大神（ケツミコノオオカミ）Ⅱ素戔鳴尊（スサノオノミコト）が祭られている。熊野夫須美大神は万物の生成をつかさどる生

◆大門坂



産和合の神様で「むすびの神」とも称せられている。神仏混合で仏名は千手観音様。

しかし何といっても那智大社の荘厳な霊域は落差百三十三メートル、日本一の大滝によって醸し出されている。もともと熊野信仰は古代人が大自然に対して抱いた畏怖心から発している。那智の大滝はその概念を代表する心像風景で縄文時代から神のおわす所として崇拜されてきた。滝を囲み、その背景に連なる森林は原生林で太古の昔から変わらずに存在している。古色蒼然たる鎌倉積かまくらづみの石段を降り、滝を眼前にすると風向き次第で水霧に覆われる。滝は三筋に分かれ、とうとうと流れ落ちている。滝の落ち口（銚子口）は幅十三メートルでその上に注連縄が張られている。昔から神事にのっとり注連縄の張替えが年に二回行われる。滝のふもとには飛瀧神社がある。「寿命を伸ばす」祈願所があった。これも瀧にあやかる願望であろうか。山は森、水の源であり人間を、動物を養う。山は神で

あり、人間の魂は山に帰る。水は人間の生命を育む全てである。那智の滝が神格化されるのはごく自然な成り行きであった。多くの聖人がここで修行し、行幸を終えた法皇一行、もろもろの熊野巡礼者が祈りを捧げた。かくなる一連の情景が頭をよぎるのである。

那智大社の社殿はもともと滝の傍にあった。それを少し離れた、展望の効く現在地に移し替え、新社殿を築いた時が仁徳天皇の五年（三一七）というから恐れ入る。その後、平重盛が造営奉行として新装。織田信長の焼打ち後、豊臣秀吉が再興。徳川吉宗が享保の大改修。昭和十年に再び改修工事そして今日に至る……とある。こうして連綿と時の権力者達によって社殿構築が受け継がれてきた。

境内には樹齢約八百五十年と推定される楠の巨木がある。この木も速玉大社と同じく平重盛が植えたという伝承がある。「胎内くぐり」と称して幹の空洞を抜けられるほどの巨木である。また、当社の神紋も三本足の八咫やた



◆大楠の木

鳥で、神武天皇の東征の折り、大和国へと道案内した後、那智大社に戻り、石になったという（鳥石）。

青岸渡寺

那智大社に隣接して大滝寄りに青岸渡寺（せいがんとうじ）はある。朱色がひととき目立つ三重塔と対をなす大滝とのシンメトリーは美しい。創建は仁徳天皇時代に遡る。インドから熊野に漂着した裸形上人が草堂をむすんで観音像を安置したのが始まりと伝えられている。本尊は如輪観音。後に西国三十三所霊場の第一番札所となった。青岸渡寺は青い海を渡ると浄土があるという信仰。インド南端の観音の聖地コモリン岬に比せられているという。そこへの出発口が補陀楽渡海の補陀楽山寺とつながっている。本殿は豊臣期の桃山建築。現存する社としては最も古い。篤い信仰が明治の神仏統廃合令を寄せ付けず、生き残った稀有な例でもある。

熊野那智大社・青岸渡寺、那智の大滝の巡

礼を済ませた一行は再び熊野本宮に戻る。いわゆる三山巡りである。ある者は新宮から熊野川を遡りし、またある者は青岸渡寺の鐘楼横から古道に入り、大雲取越え、小雲取越えを経て本宮に戻った。歌人藤原定家を伴った後鳥羽上皇一行は後者の道を辿ったようだ。そして本宮からはもと来た路に戻る。熊野詣は、来た路を逆にたどるところに意義があった。それは生きながら死して浄土に成仏し、再び現世に帰っていくという思想なのである。その意味では神域の路を歩く行為そのものが祈りであり、熊野巡礼の目的であったとも云える。

（おわり）

〈参考文献〉

「熊野古道を歩く」

宇江敏勝監修 山と溪谷社

「八軒屋の今昔」

永田屋昆布本店

郷土史家

名越律夫先生談

「熊野まんだら街道」

神坂次郎 著 新潮文庫

「日本の原郷 熊野」

梅原 猛 著 新潮社

「森のころと文明」

安田喜憲 著 NHK出版



◆三重の塔と那智の滝

2005

9

絵と文

村上健

「もう、もう、もう」

われながらちょっと古い建物ばかりに目がいく理由はなんだろうかと自問してみました。

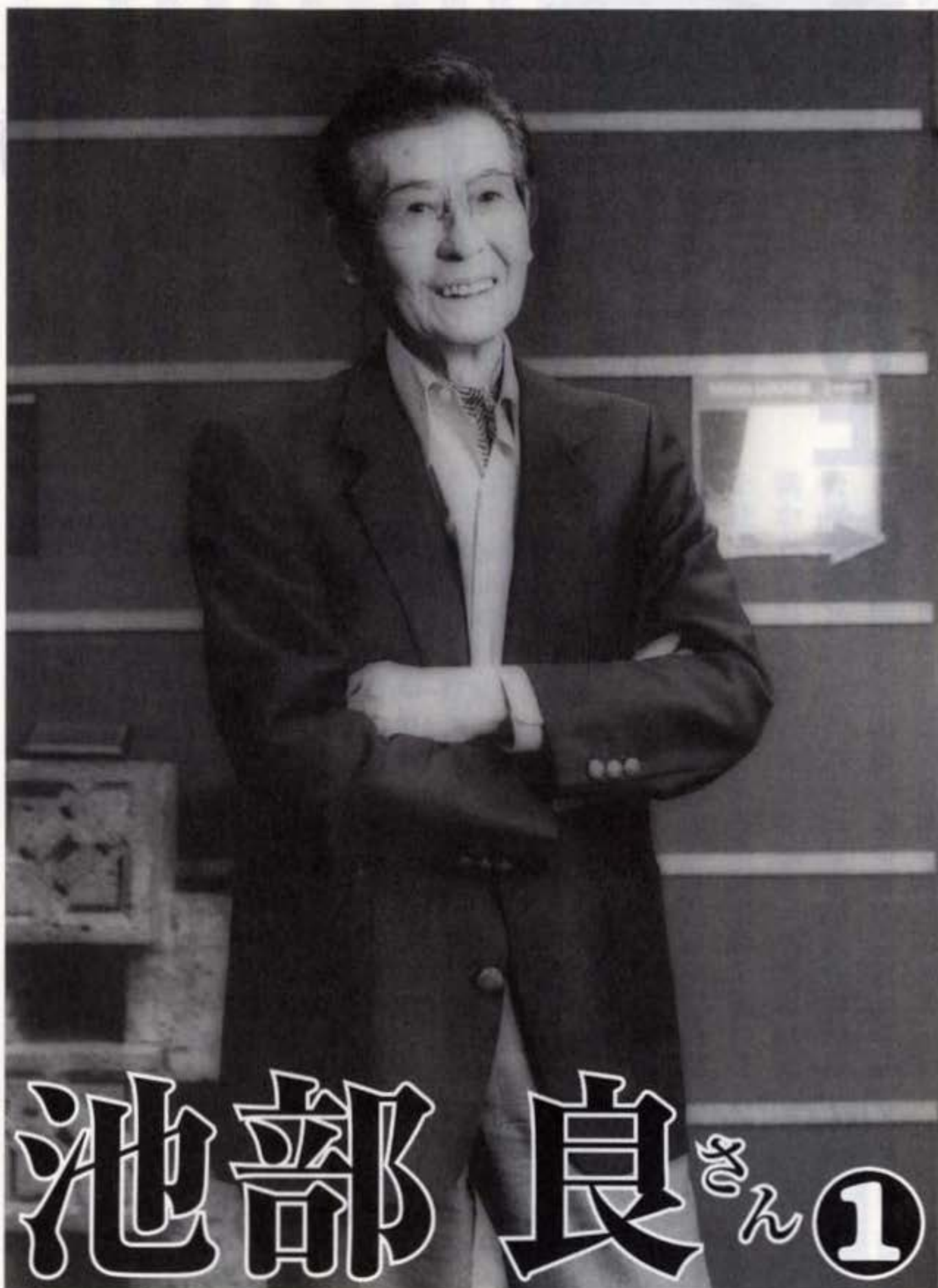
まずは寄る年波で、少年期に慣れ親しんだ風景への郷愁が強くなってきたせい。しかし、東京の下町根岸で古い賃貸ビルを描く内に、もう一つの理由に気が付きました。それは、時代からの「微妙な遅れ」かなと。

賃貸ビルには、その時々のはやりすたりを反映してさまざまなお店や会社が入ります。例えば六本木ヒルズや汐留の再開発地域などには、時代の波に乗った企業が集まりますが、古いビルには、時代からやや遅れ気味の業種が多いと思えるのです。

でも、実はその遅れこそが一生懸命時代についていく大多数の人（無論私も）の思いに重なるのでしょう。どちらに風情を感じるかは言うまでもありませんね。

連載

会いたい人 関 容子



池部良さん ①

撮影／タカオカ邦彦

毎年十二月、文藝春秋社の忘年パーティーが都内のホテルで開かれるが、その会場で何度か池部良さんの姿をお見かけしたことがある。池部さんは文春から面白くて歯切れのいい名エッセイ集をたくさん出してしているので、もちろん執筆者として招かれているわけだが、往年の大スターは立ち姿からしてスマー卜で、そのあたりの空気がばつと花やいで見えるのはやっぱりすごい。

戦後四年目に封切られて大ヒットした映画『青い山脈』では、白線入りの丸帽をかぶった高校生役で天下の人気を集めたが、そのとき既に三十二歳と聞いているから、それから指折り数えても八十路はとうに越しているはずなのに……この若々しさ、爽やかさは何なのだろう。

「ぼくは東宝の文芸部に入って、末は映画監督、と思ってたのに、島津保次郎監督に強く求められて『闘魚』という作品に、じゃあ一本だけ、というつもりで出ましたけど、あれ

だって二十二歳にして不良少年の役（笑）。その後二本撮ったところで兵隊に取られて五年も無駄をしますから、それからの人生、十年、二十年とどんどん前倒しして行って、今ではそうだなあ、五十年くらい前倒ししてるかな（笑）」

ちよつとくぐもった声も、東京つ子独特の言い廻しも、さんざんサウンドトラックで聴いてきた台詞のようになつかしい。

「ぼくのこの声ね、いつだったか録音技師さんのベテランがぼくを呼ぶから、何？ って行ってみると、今ね、良ちゃんと節ちゃん（原節子）の二つのサウンドを聴かせるからよく聴いてよ、って。そしたら何となく音質が似てるらしいんですよ。ほかの人の声の波型は一本なんですけど、この二人のはもう一本細い複線がくつついてる。何だか知らないけど珍しい声だよ、って言われた」

みんながそれぞれに自分の仕事を楽しんでいたころの撮影所のなごやかな情景がうかが



戦後大ヒットした映画、「青い山脈」での池部さん

池部 良さん ①

える。それにしても天下のスターに面と向つて、良ちゃんと呼ぶところが愉快。

池部さんは大正七（一九一八）年二月、東京・大森の山王で生まれた。父は洋画家の池部鈞で、その美術学校（芸大）時代の同級生岡本一平の末の妹篁子が母。

「母方の祖父は岡本可亭と号した書家で、弟子に若き日の北大路魯山人がいたそうです。東京・京橋の鞘町で育った母は、鞘町小町と呼ばれたようですが、口の悪い従兄の岡本太郎さんによれば、鞘町って老若取り混ぜて女は五十人もいねえとこなんだそうですけど、でも顔が小さくて姿のいいおふくろでした」

池部さんはきつとこの美人の母親似なのだろう。

「母と言えね、関東大地震は大正十二年の九月だから、ぼくは五つ。雨上がりで朝から蒸し暑い日で、母は洗い髪を庭先の縁側に出て櫛で梳いていたんですよ。きれいな項だ

と思つてぼくはじつと眺めてたんですから、かなりませてますね。で、グラツと来たら、父が画室から庭へ飛び出して来て、ぼくはてつきり助けてくれると思つたから、お父さあん、つて叫んだのに、こつちには目もくれずに母を抱えて葡萄棚の下の安全な場所へ避難させてました。次がようやくぼくの番でしたけど、このとき父が大事に思つてる順番、というのがわかりましたね」

小学校は当時の大森入新井尋常小学校。池部さんはずっと六年生までクラスでビリから二番目くらいの超チビだったという。その後の百七十三センチの長身からは想像しにくい話だ。

「のん気な性分で、成績表はいつでも甲なしの乙だくさん。親父からは、お前は俺に似ないで脳が悪い、こんな出来の悪い倅を作った覚えはねえんだが、つて。これがいつも同じ台詞（笑）」

しかし明治学院中学に入学して無事卒業

し、高校受験には失敗して浪人するものの、立教大学予科の「十月入学生臨時募集」に挑戦してみごと合格している。

その翌年（昭和十一年）のこと、池部さんは二・二六事件にもこんな形で遭遇した。



洋画家の父、釣（ひとし）さんと、岡本一平さんの妹、母簗子（こうこ）さん、そして愛犬ジャランと。昭和三十年頃、杉並の自宅にて

「この日は大雪でね、学校ではみんなが寒い寒いって、教室の天井板を剥がしたり、机の脚を引っっこ抜いたりしてストーブで燃やしてました。英語の先生が入ってきて、おいおい君たち立教を壊しちゃ困るね、なんて言っ

たとき、そこへコートも着てない小柄な学生が飛びこんできて、床にぶつ倒れると、お祖父様が殺された、って何回も叫ぶんです。高橋っ、大丈夫か、ってみんなが駆け寄って、それが時の大蔵大臣高橋是清の孫だとわかるんですが、そのあとぼくと物見高い連中四人で、三宅坂の現場までタクシーで行ってみよう、ということになって。でも四谷塩町あたりで、抜刀している警官に追い帰されましたけどね」

池部さんて、歴史的な大事件をこんなふう

に身近に語れる人なのだ……と改めて思う。

立教時代の武勇伝はいろいろあるらしいが、英語劇『カーティフを目指して東に』（ユージン・オニール）に主演したこと、映画鑑賞に明け暮れて、監督をめざしたくなる一本にめぐり会ったことが、一大トピックスだ。「英語劇は水夫のハンクって役。胸を病んで痩せてるからびったりだという拔擢なんだけ

ど、長い長い独白があつて、毎晩英語の夢にうなされ続け。この先、役者だけは絶対にやるまい、と固く決心しました。映画を観るほうは、『会議は踊る』とか『制服の処女』とか、中毒になるほど洋画は観てましたが、日本映画は貧乏くさいのがいやであんまり観なかった。それが偶然、ひよんなことから池袋の二番館にかかっていた吉村公三郎監督の『暖流』を観てびつくりしたんです。新鮮、明るい、キメが細かい、リズムがある、人間像が浮び上がってくる……。衝撃から立ち直って、映画館から五歩歩いたらもう、監督になろう、と思つてた（笑）」

二、三か月後、新聞広告に東宝がシナリオライター研究生を十名募集、とあった。「十人採るというのに三百人からの応募があつて、それが第三次までパスしたところは十キロも痩せてましたよ。親父は、及ばぬ鯉の滝登りだ、いい加減に諦めろ、と言つてましたが、なぜか最終まで残つて、結局十人の中に

入ったんです」

立教と掛け持ちで通った研究所も、昭和十六年三月、大学と同時に卒業。しかも十人中で希望通りに東宝文芸部に入れたのは池部さん一人だった。

「入ってはみたものの、もうフィルムがわずかしき配給されない時代になってましたから、映画が作れない。そうなる会社側は、助監督なんて使い道のないゴミだね、従って初任給も半分だ、って。東宝はケチだとは聞いてたけど、こうも早く現れるとはね（笑）。ろくな仕事もなくて漫然と過ごしていたら、ある日島津監督が呼びだというんです。研究生のころから尊敬している大巨匠に呼ばれて緊張して出向くと、今度丹羽文雄さんの『闘魚』を映画化するんだが、その不良の役が、なまっち

ろくてひよろ長くて頼りねえとこがお前さんにぴったりだからやらねえか、っておっしゃる。俳優は絶対やりません、って即座にお断

りしたんですが、池部よ、俺はお前さんの頭の中には、親父さん譲りの芸術の才能が天神様みたいに鎮座ましましてと思うのよ、聞けばお前は来年二月にや軍隊に入るんだってな。そうしたらその明日にも死ぬかも知れねえ。買われたときは売らなきや損だ。その代り、無事に兵隊から帰ったら俺の助監にしてやるが、それでどうだ、って言われて感涙。はいっ、不良少年、やらせてください（笑）」

この出演が評判を呼び、続けて『希望の青空』では高峰秀子と、『緑の大地』では原節子と共演したところで、かねて決められていた入営の時期になった。

「最後のぼくのシーンを撮り終えた夜の九時ごろ、日の丸の旗に大先輩方が放射状にサインしてくださったんです。すごいメンバーですよ。高田稔、入江たか子、藤田進、原節子、高峰秀子、花井蘭子、山根寿子……ですからね。大森の家に帰る前に、近所の床屋で頭を五分刈りにしてもらって、親父、おふくろ、

弟の光介と四人で最後の晚餐。と言っても配給の酒と目刺しくらいのものですけどね。そうこうしてるうちに明け方になったんで、改めて畳に手を突いて、永い間お世話になりました、ってやったら親父が、バカヤロ、嫁に行くんじゃないんだ、って（笑）」

昭和十七年二月、雪の降る中を早朝四時半に家を出て、駒場の部隊に入営する。

「営門の前で、おい池部よ、という塩辛い声がするので、見ると島津監督。水筒の蓋に特級酒をとくとくといいでくれて、お前は人が好いから乗せられてすぐその気になりそうだ。死に急ぐなよ、と言ってくださったのに、はまた感激しました。駒場には一週間いて、それから品川駅を出発して中国へ向かわされましたけど、復員までの苦労なんてものは筆舌につくしがたいですよ。とにかく俳優をしてたというだけの理由で、上官から理不尽な殴る蹴るの暴行を受けるんですからね」

でも大学出の池部さんはじきに幹部候補生

となり、上海市内の軍司令部から颯爽と馬に乗って出てきたときは、素敵な少尉さん。

「そうそう、あのときぼくに向って敬礼もせず、良ちゃん良ちゃん、と呼びかける一等兵がいたんですよ。見ると背中を丸めた芋俵みたいな身体にダブダブな軍服を着て（笑）、縮まりの悪いしゃがれ声で、ぼく従兄の太郎だよ、って言うてる。あ、岡本太郎さんだとわかって馬から降りると、あちらは七つ年上で、ぼくが小さいところにちよつと会っただけなのに、よくわかりましたね、って言ったら、絵描きは一度見たものは忘れないよ、って、名台詞ですね。太郎さんはパリで注目され始めたときに、戦争のために日本へ帰国したところを召集される、という憂き目に遇ったんだね。良ちゃんは少尉だから毎日うまいもの食ってんじゃないの？　なんてギロリと見上げられたけど（笑）、職業軍人と違ってわれわれには将校の特権なんてありませんよ、って答えて別れました」

（つづく）

人の死の縁は、かねておもうにもかない候わず、にわかには大路みちにて、終る事も候。又大小便利のところにて死ぬる人も候。前業のがれがたくて太刀かたなにていのちをうしない、火にやけ、水におぼれて、いのちをほろぼす類おおく候えば、さようにて死に候とも、日ごろの念仏申して極樂へまいる心だにも候人ならば、息のたえん時に、阿弥陀・観音・勢至、来たりむかえ給うべしと信じおぼしめすべきにて候なり。

『往生浄土用心』

人が死ぬ時のことなど、日頃の考え通りにいくものではありません。往来で突然倒れて死んでしまうこともあれば、お手洗いで用を足している最中に死んでしまうこともあります。これまでの行いに端を発して刀などで斬られて命を失うこともあれば、火事のために、あるいは水に溺れて命を落とす人も多くいます。しかし、たとえそういう死に方をしても、日頃からお念仏を称え、極樂へ往生したいという心さえ持っている人ならば、今まさに息が絶えようとしているその時に、阿弥陀さまは観音菩薩や勢至菩薩と共に迎えに来て下さると信じ、思い定めるべきです。

人の死の縁

去る七月二十三日午後四時過ぎのことでした。

遠くから、かすかに、しかし、耳をつんざくような悲鳴が聞こえてきました。

「火事です！ まだ中に子供がいるんです！ 誰か助けて！」

その直後、階下で私を呼ぶ父の声がしました。「火事だ、急いで降りてきて」と。

火元は、門前の魚河岸通りに面するSさん宅の二階でした。現場に駆けつけると、Sさん宅は激しい炎に覆われています。まだ消防車が到着しておらず、近隣の人たちがそれぞれの家の水道からホースをのばして少しでも火の勢いを抑えようと奮闘しています。しかし、その勢いは弱まるどころか増していくばかりです。ふと隣家に目をやるとK店の奥さんがお店の品物を外に運び出しています。「私もお手伝いを……」と、お店の冷蔵庫から品物を一緒に移しはじめました。ところが、しばらくすると火の手はこのK店にも回り、次第に煙で視界が遮られ、息もできなくなってきました。もう私たち一般人になす術はなく、ただ茫然とその推移を見守るしかありませんでした。その間、横浜東部地区でも震度五を観測する地震が発生したそうですが、緊張していたためか、ほとんど揺れを感じることはありませんでした。

周囲の喧噪の中、鎮火するまでに一時間半ほど経ったでしょうか。最終的に、Sさ

ん宅の二歳の男の子と一歳の女の子、そして二人のお孫さんを助けようと二階の子供部屋に駆け昇ったSさんの三人が炎に巻き込まれて亡くなりました。翌二十四日の朝刊各紙でもこの火事の被害が報道されていました。

実は、冒頭の法然上人のお言葉には、次のような前段があります。

先徳たちのおしえにも、臨終の時に、阿弥陀仏を西のかべに安置しまいらせて、病者そのまえに西むきに臥して、善知識に念仏をすすめられよとこそ候え。それこそあらまほしき事にて候え。ただし……

【現代語訳】（恵心僧都源信はじめ）高僧方の教えにも、臨終の時には阿弥陀さまの仏像や仏画を部屋の西側の壁にご安置して、その前に病人の頭を北向きに、顔を西向きにして寝かせ、お念仏を称えるように善知識から勧めてもらいなさい、と説かれています。確かにこれは理想的なことといえます。けれども……）

なるほど、誰しも人は安らかな死を望んでいます。わが家の畳の上で、愛しい家族やかけがえのない親友に囲まれて、お念仏の声が静かに響き渡る中、おだやかに息を引き取ることができれば、どんなに素晴らしいことでしょう。もちろん法然上人

も「それこそあらまほしき（理想的な）事」とおっしゃっています。

しかし法然上人は、安らかな死を願おうとも、必ずしもそれが叶わない諸行無常の現実から目を逸らすことをされませんでした。「人の死の縁は、かねておもうにもかない候わず」と、わが身の力だけでは防ぎようのない事件や事故、天変地異などの災害が、時としてわが身を襲うかもしれないぞ、と訴えられました。そして、だからこそ法然上人は、決してお念仏を手放さないようにと私たちに説き続けられたのです。なぜなら、冒頭のご法語にあるように、その方の死に様が、まわりの人からみてどんなに悲しいものであっても、その方が常日頃から浄土往生を目指してお念仏を称えていれば、その方の命が尽きる時には、必ず阿弥陀さまや観音・勢至両菩薩がその方の前に自らお迎えに来て、お浄土へお導きくださるからです。何ともありがたい法然上人のお言葉であり、阿弥陀さまによる救いのお力ではありませんか。

火災当日の深夜、ライフラインの復旧工事に黙々と取り組む方々の脇で、焼け焦げたSさん宅に向かって、阿弥陀さまの救いのお力が亡くなられた二人に届くよう、しばしお念仏を回向させていただきました。合掌

（大正大学専任講師・林田康順）

日本酒のことば 日本酒のじかん 番外篇

日本酒が特級、一級、二級などと区分けされていた時代があった。私はといえばその頃からただ呑んで騒いでいた。そういうえば合成酒なんていうひどいものもあった。四〇年ほど前、ガード下の安呑み屋で二級酒のお燗を注文すると、たしかお銚子一本七〇円といった値段だった。二百円しか持っていないのに一人前の顔をして、ひとりでカウンターに座り「お通しはいらないよ」などと言っていたのは大学生の私だった。

カウンターの隣に座ったおじさんが「今日はちよっと競馬で稼いだから赤をくれ」と言う。「赤？」それはいつたいたいなんだろう、と思ったら、割烹着を着た

おばさんが「はいはい特級酒ね」と返した。よく聞いてみると特級は徳球のもじり。つまり共産党の徳田球一の略なのだそうで、もう当人はとくに除名かなんかになっていたが、符牒として生きていたのだった。つまり世の中はまだまだ戦後真只中の時代だったのだ。

誰もが酒の銘柄など問わないで、がん呑んでいたが、ある頃から剣菱、菊正宗といった辛口の酒がもてはやされるようになった。しかし、まだまだ全国ブランド系の大関、白雪、爛漫、お使い物だと月桂冠といった時代だった。

そのうち地酒ブームというものが起こった。「越の寒梅」が幻の名酒と呼ばれ、

蓮門小子＝走時代臨時



珍重された。「本日入荷」とか店の前に貼り出され、「お一人様二合まで」などという馬鹿なことをいう店が続出した。こんな水みtainな酒が呑めるかとも思ったがいつの間にやら、こうした地酒を「冷や」で呑む習慣がついてしまった。常温ではなく冷蔵しておいたのを呑むのである。昔は「冷や酒」なんてものは堅気の呑むものじゃなかった、と述懐するおじさん達はいっぱいいる。戦前の新派の芝居では忠義の老番頭におかみさんが尋ねる。「言っとくれ、もう全部、覚悟はできてるから」「は、はい、それでは申し上げますが、この間、夜中に若旦那が台所で」「え、台所で?」「ひ、冷や酒を……!」

このやりとりだけで、客席は泣いたのだった。ああ、その若旦那はもう人間ではない。絶対に立ち直れないのだと一瞬にして全員が共感できたというのだ。しかし、最近じゃ若い女の子ががん冷酒を飲む。おそろしいことである。

「越の寒梅」ブームには漫画の「あぶさん」が貢献していると思う。大酒呑みのスラッガー南海ホークスの景浦は新潟出身だから、描き方は当然オーバーになったのだ。蔵元や杜氏が注目されたのは同じく漫画の「夏子の酒」だとも思う。

ああ酒。

たかだか、一日の疲れを癒すあの呑物に今日もまた付き合うか。あーあ。



浄土の道

真野龍海著

法然上人鑽仰会

定価1785円 著者・真野
龍海(天光院住職)
お問い合わせは法然上人
鑽仰会まで

このたび『知恩』誌上に平成十三年から十六年まで連載された「浄土への道」が単行本として一冊にまとめられ、当「法然上人鑽仰会」より発刊される運びとなりました。著者真野龍海師は、碩学の誉れ高く、かつては大正大学学長にのほり、現在は当「法然上人鑽仰会」会長にして、浄土宗勸学、浄土宗布教委員長、知恩院顧問、増上寺学監等、要職を兼任され、二〇〇五年宗門功労者となりました。本書は難解な引用等を一切せずに、きわめて平易な言葉で、しみじみとした実感をふくめた柔らかい言い回しや興味深い挿話をもつて語られた、能家、在家を問わず誰にとっても読みやすい一書となっております。

前半にあつては「本願」の「本」とは梵語で「プールヴァ」この意味は「古くていつまでも新しい」という意味であるという優しい解説。「聞名」と「称名」そして「念仏」の概念の根源的な解説など、どれも興味深く読むことができます。また、こうした本格的な叙

J-BOOK

述の合間に、当「法然上人讃仰会」の編集事務を担当していた若き日に、銀行の窓口で「法然上人さん」と呼びだされ、面映い気持ちになったというエピソードが挟まれ、思わず読者を微笑ませるかと思えば、「名」を呼ぶ「名」を呼ばれるということの不思議さを敷衍して、

国々の名乗りを受けて御忌の僧 龍

といった著者精進の佳句が載っていることなど、読んで和やかな気持ちになることができます。

中後半には法然上人のお悟り、その交友、法然上人のお弟子たちそれぞれの面影を描きつつ、念仏に生きることの大切さが説かれますが、これも自然体の文章で、たとえばご自身の旅の見聞に即して書かれたり、ご趣味の歌舞伎観劇の素養において易しく絵解きされるなど、当意即妙の表現がふんだんに用いられ、その独特の語り口によって見えてくる独特の世界が繰り広げられております。

また著者の折々に描かれた淡彩デッサンがページの幾つかに散りばめられ、これも俳句

と同様、なかなか達し得ない静謐な境地を示して、心和むものとなっています。

最終章、元宝塚トップスターにして、琵琶奏者である上原まりさんとの対談は、こうした著者の幅広さをもっとも物語るといふべき章で、「平家物語」をテーマとしながら、音楽と鎮魂、旅、琵琶と仏教思想との深い関連、法然上人の女性観等々、融通無碍に語りつくす楽しさ、玄妙さは、えがたいものとなっています。

カバー装丁は二河白道を喻して、真紅と紺碧の狭間に純白の背表紙を置き、まさにタイトル『浄土の道』を体現させております。

また、この本とは別に作製された『浄土の道・絵はがき』は、総本山知恩院、大本山増上寺の、さまざまな季節における著者等のスケッチです。淡い彩色がなされ、つねに柔らかな陽射しの感じられる作品となっております。
(編集部)

チャーリーと チョコレート工場

監督 ティム・バートン

丸の内ピカデリー2ほか全国松竹・東急系にてロードショー



©2005 Warner Bros. Entertainment Inc. All Right Reserved

原作者、ロアルド・ダールは九歳で寄宿学校生活に入った日から、母親と死別するまでの三十二年間、少なくとも週一回はママ宛の手紙を書き続けた。母親の死後、大切に保存されていた六百通以上の、息子からの手紙が発見された。見事な、母と子の美談ではないか！

長じて女優パトリシア・ニールとの間に次々と生まれた、四人の子供たちを寝つかせるために、夜ごと脳髓をしぼって語り続けた「面白いお話」が、奇想天外な数々の童話に実を結んで行く。父と子供たちとの、心温まる佳話ではないか！

一九六四年の初版いらい、既に三十二ヶ国語に訳され千三百万部に及ぶ発行部数を誇る、ロングセラー「チャーリーとチョコレート工場」の映画化に当り、監督ティム・バートンが、原作にはその存在をほのめかされてすらいらない人物を登場させることによって、観客たちに強く印象づけようとするテーマ「家族の絆」の全肯定が、まさにダールの「生きざま」であり、原作では、いくつかのモチーフの一つであったこのテーマを、ライトモチーフに仕上げることを以て、監督は「原作により忠実で」あろうとしたに違いない。

ことばに関する鋭敏な感覚とウィットとをダールと共

有する詩人、田村隆一氏の日本語訳が、一九七二年の初版いらい二十九刷を重ねている、原作の荒筋を敢えてご紹介するならば、たぶんアメリカ、のどこかに世界一有名かつ巨大なチョコレート工場があり、街外れの傾きかけた小屋には「家貧しくして孝子あらわるの諺」を地でゆくチャーリー・バケット少年と、六人の大人たちが極貧の生活を営んでいる。両親と両親の両親たちと少年との七人は、暖かく勁い「家族の絆」に結ばれている。

いっぽう大工場を経営する「チョコレートの魔術師」ウィリー・ウォンカは、泉の如く湧き出るアイデアが次々と他社に盗用されるのに業を煮やして、十五年まえ企業秘密漏洩防止のため数千人の従業員すべてに解雇を申し渡し、工場は閉鎖され生産は停止した。ところがフシギなことに十年まえ、閉鎖されたままの工場で生産が復活し、次々とヒット商品が世界各地に提供されるようになっていく。

そんな或る日、驚くべきニュースが全世界駆け巡る。曰く「ウォンカの工場は五人の子供たちを招待し、秘密と魔術の全てを公開。五人のうち一人には想像もつかぬような特別賞を贈呈。全世界で販売中のウォンカ製の板チョコ五個の包み紙の下に潜んでいるゴールドデン・チケ

ット五枚が、幸運の入場券」。

貧しいバケット家にもテレビがあつて、食い意地・肥満少年、大富豪の我侭娘、懸賞コンテスト総ナメ娘、テレビゲーム狂のコンピュータ少年が、それぞれゴールドデン・カードを手に嫌味たっぷりの態度で紹介される。そしてなんと！最後の一枚はチャーリーの手に入る。この時チャーリー曰く「ぼくは辞退する。このチケットを競売にかければ、家族の暮らし向きが良くなる筈だから。」同じ高潔さが大人たちから披瀝され、結局チャーリーは父方のジョーおじいさんと工場見学に参加。肥満少年とその母、わがまま娘とその父、懸賞娘とその母、コンピュータ少年とその父と共に、工場主ウォンカじきじきの案内のもと、チョコレートの河が流れるキャンディの庭園を手始めに、夢のような工場見学が始まるのだが、いっしょに悪夢に転ずる者もあり、チャーリーを除く四人は各自の性向の然らしむる厄難に見舞われることとなる。そのディテイルの展開あるいは描写に、惜しみなく発揮される原作・演出の、巨細に亘る奇知と想像の飛躍力と表現力とは、ただ感嘆するのみ！

ところで、ウィリー・ウォンカを演ずるのが、ジョニー・デップである。四月号の「フレンチなしあわせのみ

つけ方」では役柄の上でも出演者としても、一貫して「無名」を通すという不可解な扱いをうけた、あのデップが、水を得た魚の如く縦横無尽、溢れる才知と奇想の赴くまま大チョコレート工場せましと駆け巡る。ただし原作のウォンカは弁舌も立て板に水、淀むことを知らないのに、デップ演ずるウォンカの弁舌は時としてよどみ、瞳も「あらぬかた」をさまよう。それが再三に及び、淀みは「親」という単語を口にせねばならぬ時に発生することに観客が気付くころカット・バックの手法で、原作には登場せぬ父親（歯科医）との、歯並びとチョコレートをめぐる幼き日の葛藤が回想され、独立独歩、奇想奇行の基底にコンプレックスとして蟠る、裏返された「家族の絆」が暗示される。

一件落着後、この企画の真意は「後継者選び」であった事が明かされ、最後に残ったチャーリーは大チョコレート工場の相続者たるべく、足手まといの老いぼれどもを厄介払いすることを求められるが、「家族の絆」を最優先させるチャーリーは断固拒絶する。予想だになかった拒否のショックで、ウォンカは自信を喪失し、得意の発明の才も枯渇する。或る日思い立って患者を装い、永らく音信不通だった父の歯科医（世界で最も多くの映画

に出演した俳優、クリストファー・リー）を訪ねると、診療室四方の壁面せましと貼り巡らされているのは、ウォンカ・チョコレート工場の盛況を伝える新聞の切り抜きばかり。父も患者の小白歯の特徴から、息子であることに気付いた瞬間、永年の不和は氷解し「家族の絆」が再生する。目のウロコの落ちたウォンカに家族ぐるみの同居を申し込まれたチャーリーには、異論のあろう筈もなく「めでたし、めでたし」となる。

例によって蛇足を三本。ウォンカの最新最大の発明「テレビ・チョコレート」披露の場面でTV画面に映し出される「二〇〇一年・宇宙の旅」ファーストシーンのパロディは、いかにもダール好みで、原作により忠実であろうとするバートンの快心の演出であろうし、奇知縦横、ブラック・ユーモア溢れるダールの「ざれうた」も、活字のみの原作では当然の事ながら「何の曲もない」のに、ダニエル・エルフマンの作曲と歌声を得て、同じく「原作により忠実な」ミュージカル場面を構成することとなった。この場面の主役たちにしてこのフシギな工場の謎を解く「鍵」となるウンパ・ルンパたちには、スクリーンで対面されんことをお奨めする。（長野・十念寺住職）

FORUM

浄 土 の 広 場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

● 滝

〔特選〕 親不知子不知雲の脚速き

佐藤雅子

富山県にほとんど境を接する新潟県の親不知は、北陸道一の難所である。黒々と雲が走り、打ち寄せる日本海の波がしぶいて道を攻める。地名を使つてリズムよく仕立てた。「奥の細道」では簡単に扱われているのだが。

〔佳作〕

四囲の嶺に雲とどこおり梅雨に入る

金谷 友江

夏雲や甲斐の風鳴る石切り場

河合富美枝

雷雲の窓覆いくる岬の宿

石原 新

● 遠

〔特選〕 遠泳のゴールへ抜き手早まりぬ

井村 善也

以前は中学校でもよく遠泳大会が行なわれたが、今ではごく限られているようだ。長い距離に疲れはてて、どうにか浮かべているよ

うなのが、もうゴールだというと急に早くなる。その様子がよく出ていると思う。

〔佳作〕 遠き雷水羊羹に刃を入れる

園尾明日香

十葉の密集遠くに赤子泣く

阿古谷 優

遠雷に吠えて戸を搔く小犬かな

伊藤寿美子

●自由題

〔特選〕 紫陽花を裳裾に地藏笑みたまう

地藏は「さん」を付けて呼ばれるくらいだ

一丁田美恵

から、菩薩の中では最も親しまれていると言えよう。何本ものあじさいが、台座を隠すように咲いている。それを「裳裾に」という。いかにもふさわしい表現である。

〔佳作〕 鮎食うべ京の一夜は片どまり

片桐てい女

縁陰に猫の染まりて眠りおり

本郷 東児

新緑の洩れ日に神場立ち憩う

藺田 郁子



参加作品

編集部選

遠

遠足のしんがりにつく木の葉蝶	佐藤雅子
遠花火下半分は山の陰	中島一子
甘酒や父耳遠くなり給ふ	片桐てい女
遠雷は音のみ暑き置きて過ぐ	山本美代子
薫風や夫と遠出の車椅子	中島富士子
民話聴く夏炉焚くそば遠野かな	大場 清
金魚玉淡き遠嶺の星明り	河合富美枝
草木湖の噴水高し遠嶺越ゆ	周東澄江
遠山の雲の行き来も梅雨めけり	金谷友江

雲

夏空の雲とどまらず七回忌	中島富士子
雲水の歩みひとつに朝涼し	大場 清
雲を掴むやうな話や蟻地獄	周東澄江
雨雲のみるみる速く人走る	中島一子
雲形定規易々とあつかひ子雷	片桐てい女
雲の峰争いは未だ治まらず	山本美代子
一片の雲なき空を夏雲雀	山口信子
雲水の托鉢夏の町をゆく	谷しげ子

自由題

麦秋の空に噛み付くシヨベルカー	佐藤雅子
船乗り込み千両役者に紙吹雪	中島一子
蟻の道巨いなる木に穴通す	山本美代子
黄韭花匂ひ残して包みけり	中島富士子
クレソンの白すずやかに五月富士	河合富美枝
濡れ新聞紙に包みて蕨越後より	周東澄江
梅雨めくや思ひ任せぬ事多し	金谷友江
ひたひたと満ちくる入江夕燕	増田信子
餌をねだる青鷺一歩進みける	井村善也
更衣納戸の湿り匂いけり	北川弘子

浄土誌上句会のお知らせ

題

①季語ではありません

長谷自由題

締切・二〇〇五年九月二十日
 発表・『浄土』二〇〇五年十一月号
 選者・増田河郎子（『南風』主宰）
 応募方法

- いずれの題とも数の制限はありません。
 - 特選各1名・佳作各3名
- 葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

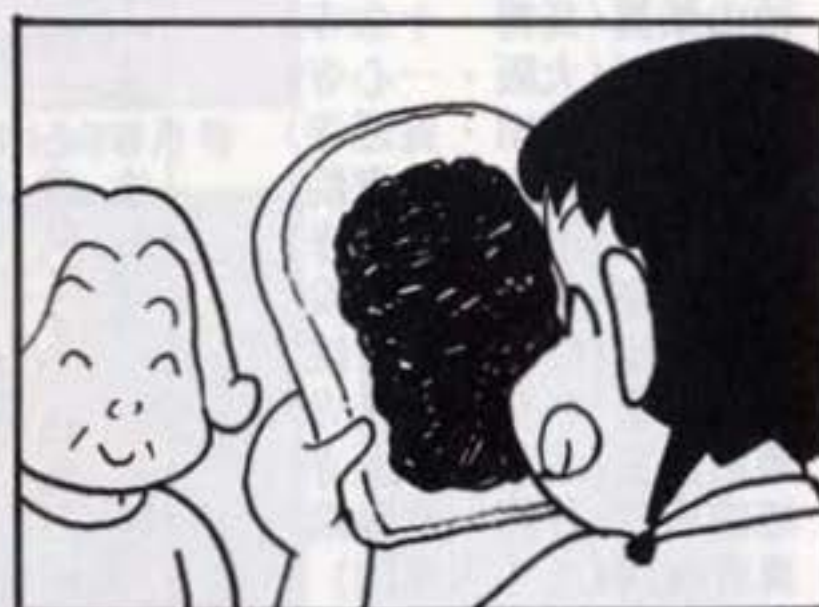
宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
 月刊『浄土』誌上句会係

さっちゃんね

23 かい目

かまちのろう



編集後記

月高く我が手元を照らしけり 岱潤

当誌月刊『浄土』は、いよいよ来年二月号を以て通巻八〇〇号になります。

昭和十年四月、当時大正大学学長でありました真野正順先生を中心に、現現下の御尊父中村辨康先生や、「三佐藤」と呼ばれた佐藤賢順先生、佐藤良智先生、佐藤密雄先生をはじめとする諸先生方が結束して、「法然上人鑽仰会」を立ち上げ、月刊誌『浄土』を発刊致しました。

当初は駅など街頭でも市販されるほどのものでしたが、先の大戦のためザラ紙数頁という体裁の時代もあり、それでも終戦直前まで発行を続け、敗戦後数年は休刊があつたものの、今日まで七十年諸先生方の多くのご努力に寄つて発刊続け

て参りました。

法然上人鑽仰会の「鑽仰」の由来は「之を仰げばいよいよ高く、之を鑽ればいよいよ堅し」という論語の故事に依るといわれています。この「鑽仰」の「鑽」という字は「きり」を指し、きりで穴をあけることを意味しているようです。我々が人格を仰ぐとき、注意しなければならぬ心構えを示しているように思えてなりません。「真に偉大な人格を師表に仰ぎ、実践を通して信仰を育てること」を目指した先輩諸先生が、この「鑽仰」の字を頂いて「法然上人鑽仰会」と名付けた心意気こそ、私たちにとつての師表でありましょう。

(長)

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
江口定信(浦安・大蓮寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
大田秀三(大本山・清浄華院)
北山大超(焼津・光心寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
袖山榮眞(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村眞道(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
真野龍海(芝・天光院)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkkan-jodo.info>

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

編集顧問

大室了皓

浄土

七十一巻九月号頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十七年 八月二十日

発行 平成十七年 九月一日

発行人 真野龍海

編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七、四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七



平成15年1月号



平成15年2、3合併号



平成15年4月号



平成15年5月号



平成15年6月号



平成15年7、8合併号



平成15年9月号



平成15年10月号



平成15年11月号



平成15年12月号

法然上人鑽仰会の



※額装寸法 47 × 59 cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円 (別途梱抱料300円)

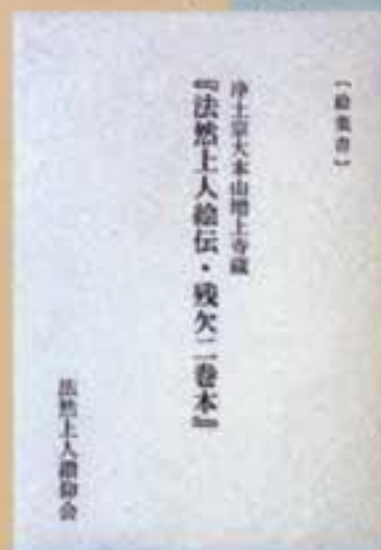


『差出人は法然さん』
600円

月刊『浄土』
バックナンバー



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット) 800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より

委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円



『ブッダ
知れば知るほど』
1,000円



当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会
電話 / 03-3578-6947
FAX / 03-3578-7036